

発刊にあたって

浄土真宗では、宗祖親鸞聖人の「御消息」^{ごししようぞく}や蓮如上人の「御文章」^{ごぶんしよう}をはじめとして、伝統的な伝道方法として、歴代宗主のお手紙が大きな役割を担ってきました。これらのお手紙は、浄土真宗のみ教えに出遇^あったよろこびから、信心の表^{ひら}白^{びやく}となっており、それ自身が仏徳讃嘆^{ぶつとくさんたん}であり、さらにはみ教えを伝えるための教義宣布^{きょうぎせんぷ}の役割を担^{にな}っているものでした。

発刊にあたって

近年では、このようなお手紙の精神を受け継ぎ、二〇〇九（平成二十一）年に親鸞聖人七百五十回大遠忌を前にして、現代の「御文章」や「領解文」^{りょうげもん}とも言える『拝読浄土真宗のみ教え』が発刊されました。内容は「浄土真宗の救いのごよこび」^{ごよこび}、「親鸞聖人のことば」や季節の折々の行事に合わせた

ことばを集めたもので、現在では、本願寺のお晨朝あしたけでのご法話の際に拝読されていることはもとより、さまざまな機会に『拝読 浄土真宗のみ教え』に基づいたご法話がなされるようになりました。

当社でも刊行に合わせて、『拝読 浄土真宗のみ教え』の内容を詳しく知っていただき、より身近なものとして味わっていただくために、月刊誌『大乘』にご法話を連載してきました。本書はこれをもとに編集し、単行本として発刊するものです。

ある教育学者であった先達せんたうは、「学ぶ」ということについて、

学ぶとは、いつでも、何かが始まることで、終ることのない過程に――歩ふみこむことである。(中略) 学んだことあかの証しは、ただ一つで、何

かがかわることである。

といわれています。「何か」とは、ものの見方、考え方、生き方、それともわたくし自身、――それこそが、親鸞聖人や蓮如上人がお手紙を通して語られたものでしょう。

このご法話が機縁となり、親鸞聖人のおことばとの出遇いが人生の扉を開き、浄土へ向かつてともに生きる第一歩となりますよう、願ってやみません。

本願寺出版社

『拝読浄土真宗のみ教え』の味わい——目次

発刊にあたって……………1

浄土真宗の救いのよろこび

はじめに——「拝読」について……………12

親鸞聖人のことば

人生そのものの問い……………20

凡 夫……………28

真実の教え……………36

限りなき光と寿の仏……………44

他力本願……………54

如来のよび声……………64

聞くことは信心なり……………72

今ここでの救い……………80

愚者のよろこび……………88

報恩の念仏……………96

浄土への人生……………104

自在の救い……………112

光の浄土……………120

美しき西方浄土……………128

かならず再び会う……………136

折々のことば

お正月……………146

〈お正月①〉……………148

〈お正月②〉……………154

お彼岸	160
〈お彼岸①〉	162
〈お彼岸②〉	168
お盆	174
報恩講	182
〈報恩講①〉	184
〈報恩講②〉	190
あとがき	196

浄土真宗の救いのよろこび

阿彌陀如来の本願は

かならず救うまかせよと
南無阿彌陀仏のみ名となり
たえず私によびかけます

このよび声を聞きひらき

如来の救いにまかすとき
永遠に消えない灯火が
私の心にともります

如来の大悲に生かされて

御恩報謝のよろこびに

南無阿彌陀仏を称えつつ
眞実の道を歩みます

この世の縁の尽きるとき

如来の浄土に生まれては
さとりの智慧をいただいて
あらゆるいのちを救います

宗祖親鸞聖人が

如来の眞実を示された
浄土眞宗のみ教えを
共によろこび広めます

『拝読 浄土眞宗のみ教え』二〜三頁

はじめに——「拝読」について

『拝読 浄土真宗のみ教え』の中の各項目のことは、親鸞聖人（一一七三～一二六三）の著述の中のおことばです。自分の気持ちを加えず、素直な心で頭を垂れ、読ませていただきましょう。

次に「読」について、三つに分けて考えることができます。まず第一に「黙読」です。お仏壇の前や、自室で心静かに落ち着いて目を通して読むことです。一日の生活のスタート前や、就寝前でも結構です。

二番目は、口を通して声に出して読むことです。わたくしはご門徒のご法事ではいつも『正信偈・和讃』を拝読しています。

ご法事の席は、浄土真宗のご門徒だけではありません。他の宗派、他の宗教の人、時には無宗教の立場の人も縁者としてお参りされています。常に聖典を持参し、各人に手渡して、おつとめの基本的なことだけ説明して一緒におつとめをします。そして、お齋（食事）の時間になると「意味はよくわかりませんが、声に出してお経を読むと心が落ち着いて、自分がご法事にお参りをしたという思いが強く感じられます」といった感想を折々に述べてくれます。

わたくしは「いま、拝読したのはお経ではありません。親鸞聖人が書かれたものです。しかし、わたくしたちは、釈尊が説かれたお経と同じような心持ちで拝読させていただいています」と応じます。

わたくしはこのたび、本書を執筆することに際して『拝読 浄土真宗のみ教え』の一項目（各二頁）を毎日二回～四回、声に出して拝読することにし

ました。自分の声を、自分の耳を通して聞くのです。目を重ねていくと心が安まる思いになりました。もちろん、回数そのものの多・少が阿弥陀如来の救いの条件には全く関係のないことは言つまでもありません。

三番目の「読」は「身読」です。親鸞聖人は、お経や七高僧※などの著書を読む時は、目や口や耳を通して読み聞くだけでなく、身体全体で読み込まれたお方があります。親鸞聖人のこのような姿勢に学びながら「拝読」させていただくことが何よりも大切なことです。

いま遇つてことができました

いまから二千五百年ほど前、北インドで釈尊（紀元前四六三〜紀元前三八三 異説あり）によって説かれた仏教（仏さまの教え。仏さまに成なる教え）

は、その後、タイ、ミャンマー、スリランカなどに伝わった南伝仏教と、中央アジアのシルクロードを経由して、中国、朝鮮半島、そして日本に伝わった北伝仏教に大きく分けることができます。

また日本の仏教は古来、十二の宗しゅう、五十六の派はがあると言われてきました。その五十六の派の中に親鸞聖人を宗祖とする真宗の十派があります。その中の一つの派が、わたくしたちの「浄土真宗本願寺派」です。

こう考えてみますと、読者の皆さんは長大な時間と、膨大な仏縁ぶつえんが調つて、いま、この本を手になされていることに気づかれたことでしょう。阿弥陀如来に出遇あうことができたのです。

阿弥陀如来は、わたくしが「たすけてください」とお願いする前に、わたくし一人ではなく、あらゆるいのちを救わずにはおかないという大きな願い